フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００５

対談：滝沢友彦　×　元田敬三

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT

●写真は独学で

事務局：３週目は、ストリートに集うスケボー仲間とその周辺をとった滝沢友彦さんです。選考員は、同じくストリートで撮っている元田敬三さんです。

元田：去年写真展を見に行かせてもらって、その時初めて作品を見ました。僕はすごく好きな写真なんですよ。

滝沢：あの時は、友達と二人でバーに展示したんですけど、何点くらいだったか、大小、ランダムに間を埋めるように貼りました。今回と同じでカラーとモノクロ両方で。

元田：結構な量があったけど、カラーの印象がすごく強いですね。写真を始められて３年くらいなんですね。仕事はグラフィックデザイナーだそうですけど、写真との出会いは何だったんですか？

滝沢：そうですね……スケボーを撮りたいという思いで撮り始めたんです。

元田：自分もスケーターで、自分の周りや、仲間というか、スケボーというサブカルチャーとかを撮りたいって？

滝沢：はじめ仲間は一人もいなかったんです。周りのデザイン学校の時の友達は、デザイン事務所とか忙しくてやめてしまう。僕は何とかしてスケボーと繋がっていたかった。写真に撮れば、ダイレクトにスケーターと接することができるかなと思って。

元田：写真の専門的な教育っていうのは全く受けてないんですか？

滝沢：完全な独学ですね。デザイン学校の時に写真の授業があるにはあった。でもグラフィックデザインの中でのことなので、例えば、広告を作る中で、使えるような写真を撮るっていうぐらい。写真は素材として学んだというか。

元田：写真を表現としてやるというのではなかったんだ。それでスケーターの人を中心に撮り始めて、そこから広がって。三年経って、今回この公募に応募したわけだけど、やっぱりどんどん見てもらいたいっていう欲求が溜まってきたんですか？　発表したいというか。

滝沢：去年の初めての写真展で、終わった後に寂しくなっちゃって、次やらなきゃと思ったんです。なんか、毎日でもおめでとうって言われたいタイプなんです。

元田：写っている人たちとは、コミュニケーションをとって撮るタイプですか？　パッて出会ったスナップショットも少しあったりするみたいだけど。

滝沢：そうですね。かなりコミュニケーションとります。初対面でいきなりっていうのは少ない。このタクシーのおじさんも仲良しなんです。あとこの人も、もう社会復帰されたんですけど、名前は知らないんだけど、かなり長い付き合いで。

元田：一見するとあまり構えずにばんばんシャッターを切っていく撮り方に見えるけど、意外と被写体の人たちとちゃんとコミュニケーションをとるスタイルなんだ。じゃあ、この人はこうだとか、裏話があるんですね。

滝沢：そうですね。わりと興味を持ったらたくさんしゃべりたくなって。

元田：カメラがあると、そういうのができるよね。写真を撮らせてくれって言ったら結構仲良くなったり。僕も出来上がった写真を持って行ったりとかしますね。

滝沢：カメラを持っていると、何もしなくても人は集まって来ますね。それにスケボーやっていると、もの珍しさからかいろんな人が寄って来るので、寄ってきちゃ撮ってという感じです。

●マテリアルっぽい写真

元田：ストロボを使ったり、目に飛び込んでくる映像が多いですね。金属的なものとか、テカテカ光っていたり。絞り込んでバチンとストレートに撮ったり、カラーで色をどんどん出したり。そういう映像的な部分でいえば、映像のイメージがもともとあったのか、それとも写真を始めてからそういうのが好きになったとか、どうですか？

滝沢：もっと生々しくしたいってどんどん撮っているうちにこうなってきた。人間味とか感情を出せないかなって思っていたんですけど、どうしてもグラフィックっぽい感じになっちゃう。なので自然にそういうギラギラしたものとか撮るようになっちゃったんでしょうかね。

元田：今までの癖みたいなのを消したいってことかな。多分グラフィックをやられていたから絵的に作ろうと思ったらいくらでも写真を作れますよね。その辺を壊していきたかったということですね。写真でしかできない、生々しさとか人間味とかを出すような撮り方に変えていったと。

滝沢：はい。前の写真展の時に言われたんですけど、一生懸命近づいて一生懸命雰囲気を出して人間らしく撮っているつもりだったんですけど、マテリアルっぽいねって言われて。やっぱりそうなんだ、物質っぽいというかモノっぽい感じ、柄みたいな感じなんですかね。感情が入らないのか考えすぎているのか……。

元田：……感情って写真には写らない。だからそれでいいんじゃないですか。モノでも人でも撮る時は気分が違うかもしれないけれど、出来てきて写真を見る時って同じじゃないですか。人も、缶ビールも一枚の写真だから。そういう割り切りって必要ですよね。撮る時には車がすごく好きだったら車を撮るとか、そういうのが出てくるからそれが面白いと思うんですよね。

滝沢：全体的に言うとグラフィックっぽい感じなんですかね？

元田：ううん。全然そうは思わないけど、結構特殊ですよね。滝沢さんは自分の好きな絵、好きなイメージみたいなものを自分でよく知っているんじゃないかって思ったんです。こういう風な絵作りしたいってはっきりしているなって。それが統一感になっていて、ジャングルジムが写っていようが人が写っていようが、バスがあったり看板があったりするけど、全然バラツキが

ない。モノクロもカラーも目に飛び込んでくるような強さがあって。人情とか吹っ飛んで映像が飛んでくるような、ストレートで暴力的な感じが出てて、そこが魅力かなって。自分が好きな文化というかファッション、そういうのも分かっているから、相手にも伝わりやすいし迷いがないなって。

事務局：何かで写真の組み方とか、見せ方みたいなのを研究したりしたんですか？　写真集や写真展を見たり。

滝沢：写真展を見に行くんですけど、写真家とか知らないんですよ。組む時は、それこそグラフィックっぽく、こういう柄みたいな感覚で組んじゃうのかな。この柄がきたら次はこの柄のほうがいいのかなって。

元田：そういうバランス感覚があるんでしょうね。前の展覧会の時も、構図の取り方とか展示の仕方とか、初めてなのにうまいなって。それはやっぱりグラフィックをやられていたからかなって思ったんですけどね。

●カメラとスケートボード

元田：撮る場所はどういう所が多いんですか？　スケーターの子たちが集まる場所を中心に？

滝沢：新宿にいつもいるので、やっぱり新宿が多いですね。毎日、絶対１０人くらいいる。どこかでスケートするぞって言われたらそっち行って。

元田：行く場所とか目的があるからいいですね。僕の場合は、家を出るところからスタートして、目的なく、さて何処へ行こうかなって。……やっぱり、スケーターの人達の魅力を、全然知らない人にも伝えたいっていう思いもあるんですか？

滝沢：そうですね。わりと街では邪魔者扱いなんで、こういうのもいいでしょっていう感じにしたいですね。

元田：スケボー禁止って書いてある場所もだんだん増えてきたしね。でも、滝沢さん自身が楽しんで撮っているから、写真を見ている人も楽しいよね。スケボーをやる時間と写真を撮る時間と区切るんですか？　休憩する時に撮ったりとか？

滝沢：特に区切らないですね。スケボーやってて何か起きたら、とりあえずスケボーを置いてカメラを取りに行って追いかけて撮るみたいな。

元田：カメラとスケートボードって、滝沢さんにとって何なんですかね。コミュニケーションのツールなんですよね。

滝沢：すごく大事ですね。

元田：僕もそうだけど、カメラだけって人は多いけど、自分でやりながらっていう人はあまりいないよね。

滝沢：スケボーの写真を撮りに来る人っているんですけれど、スケボーが分からないと、スケーターの邪魔になるんです。例えば、壁際に立っていればいいかといえば、本当はその壁に登りたいとか、花壇に座っていたらその花壇を使いたいとか。なんとなくその辺を察しないと。

元田：そうか。どこが邪魔かって分からないね。被写体と撮影者って、普通は分かれているけど、自分も被写体と同じようにスケボーしながら写真を撮るというのは珍しい。

事務局：例えば、年齢的にその仲間達とギャップが出てきて、そういう部分で自分は撮る側、見る側になったということはありますか？

滝沢：みんな年齢はバラバラで、下は１０歳下もざらで、上も全然年上の方もいらっしゃって。でもスケボーがあるとそれで会話ができてしまうので、あまり年齢は関係なくなる。僕は全然年上の方ですけどね。

元田：僕も学生の時からミュージシャン、パンクの人とか撮ることが多くて、例えば、パンクの人たちの中で僕は写真を撮る人で、どんなに仲良くなっても、いつもどこかで部外者というか。今でもそうですけど、友達になってもちょっと寂しい孤立感みたいなものを感じるんですけど、そういうのはないですか？

滝沢：写真だけ撮っている時は、寂しいなっていう感じがありました。でもスケボーも同時にやるようになったら、そういう感じもなくなっちゃいましたね。

元田：普通それでスケボーを始めると、今度は写真は置いといてスケボーばかり楽しんじゃうと思うけど。

滝沢：多分好きな度合いで言うと、写真の方が好きなんだと思います。

元田：なるほど。スケボーをやめるわけではなく、写真を撮るためにスケボーをやるわけでもない。両方楽しみながらというスタイル。写真の方が楽しいと思えるというのはどういうところですか？

滝沢：良いなと思う風景を見た時に、残したいって思いますよね。小さい時から、それが上手く人に伝わらないもどかしさを感じていたんです。写真を撮るとそれを人に見せられる。こんなの見たよ、こんな人に会ったよっていうのが真っ直ぐ伝えられるのが、面白いなって。でもスケボー仲間に怒られますけどね。この間もスケボーを一番おろそかにしているねって言われました。

●スケボー仲間

元田：スケーターの人達は、滝沢さんのことをどんな感じで見ているんですか？

滝沢：多分一番常識のある人間だと思っていますね。みんな結構勝手というか。集まっているのもただなんとなく集まっているだけで、別に深くお互いつきあっているわけではなくて、ただスケボーをやりたいからここに来ているっていう感じ。

元田：仲間は新しい人が入ってきたりとか、人が入れ替わったりするんですか？

滝沢：わりとゆっくりですけど入れ替わりますね。普通にバイバイって別れてそれっきりになっちゃうこともあるし。新しい人が来たら、「こんにちは」って、始まってそこからすごく長くなったりとか。

元田：この公募展で選ばれて展覧会やったら、以前のバーでやった時とは反響とかリアクションが全然違うと思うんですよ。被写体になっている彼らも、撮られていることをもっと意識し出したりとか、自分が写っている写真が全

然知らない媒体に出たりするし。

事務局：選考会のあとの選考員のみなさんとの座談会では、内輪の中だけで楽しんでいるだけではなくて、不思議と見ている人も共感できるものがあるという話が出ました。それがさっき言われた、半分傍観者で、半分当事者っていう距離感だったり、その辺の立ち位置がすごく良いところにいるのではないかと思います。彼らに対しても結構好感がもててしまう。

滝沢：多分、僕が個展をやるのを喜んでくれるんじゃないかと。今回はちゃんとした所だからギャラリーの中でスケボーはしないでって言ったんですけど。ジャンプランプっていう、ジャンプ台みたいなものを置いたら皆楽しめるからって言うんです。

事務局：スケボー少年でない、路上のおじさんとかもいますけど、そういうアウトサイダーみたいな人達にも興味があるんですか？　普通の通行人とかあまり写っていないですね。

滝沢：こういう人達の知識って面白いんです。話をずっと永遠と聞いちゃう感じ。普通の人達と経験も違うし、嘘も多いんだけど、その嘘も面白い。こっちもわかってて、そうだねそうだねって聞いて。

事務局：例えば、このおじさんは、スケボー仲間ではないけど、やっぱり同じ「仲間」という感覚なんですか？

滝沢：この人はよく来るんですけど……仲間なのかな。大事なお客さんみたいな感じ。他の子達は、関係ないやって思っている子もいるけど、大体「こんにちは」って挨拶して、友だちというかになっちゃう。でも、例えば、全然会っていないとか、引っ越してしまって全然会わなくなったとしても、別に寂しくないって感じ。たまたまふらっと来るんじゃないかって雰囲気がずっとある。

元田：そんなにのめりこんで深く付き合わないし、冷たくもないし、丁度良い距離感なのかもしれないですね。

滝沢：ここに写っている人達も、深入りしないでっていう雰囲気を出しているんですよ。皆そうなんですけど、タイミングが来るまでは、相手のことを全然知らないまんま。仲は良いけれど名前知らないとか。この場以外で会おうっていうのも基本的にないですね。僕もこの子達も、みんな、別の友達がいてそっちがメインで遊んでいて、夜になると、ここに集まって来る。

元田：人間大好きな人達が集まっている感じがするよね。

滝沢：そうですね。音楽とかスケボーとかそういうのが好きで、好きなことがあるなら一緒に集まってしまえばいいじゃんって感じで。

元田：写真の好きな人たちってあまり集まったりしないですよね。コミュニティを行き来するなんてしない。

滝沢：スケボーはプロがいて、一応スポーツではあるんですよね。スタントマンみたいなすごいプロがいる。でも、ここにいる子たちは、競技用の練習をしているわけではなくて。なにが楽しいのかな、みんなもきっと答えに困ると思うけど、とにかく少しでも上手くなろうと練習してる。

元田：スケボーってストリートならどこででもできる。それが他の遊びと違うんではないですかね。

滝沢：それと、何処へ行っても邪魔者扱いされてしまうから、わりと初対面でも仲間意識が生まれるのかもしれません。

●“街の目印”でいい

事務局：元田さんもストリートで撮ってますけど、滝沢さんの撮り方と比べてどうですか？

元田：結構似ています。こういうおじさんとか、ほっておけないというか、気になってしょうがないし。街の中で何かをしている人に興味があるんです。本当の顔を出している人に。その興味が近い気がしますね。

事務局：二人は、親しくなりすぎず、遠すぎずっていう距離のとり方が似ていませんか？　その場で撮らせてもらって、あとは一生会わなくても結構平気でしょう。深い関係を求めないというか。

元田：クールですよね。ドライな感じがすごくする。ところで、前回の展覧会は人が写っている写真が多かったけど、今回はモノが写っている写真が結構多いですね。もっと人物の写真が入っていても良いかなって思うんですよね。この子たちをもっと見たいなって気持ちになるんですよね。

滝沢：人を入れるとどうしてもスケーターが多くなってしまって、その感じがなんとなく嫌なんです。僕達が真ん中ですっていう感じが。だから他のとバランスをみてスケーターの写真を減らしているんです。別に主役になりたいわけではないし、ただ“街の目印”くらいになっていればいいやって思う。この車がずっと同じ場所に置いてあったら、多分僕らが同じ場所でスケボーをやっているのと同じ意味で、ただの目印っていうか。ただそこに居るっていうだけのことで、それが偉くもないし悪くもない。

事務局：普通はスケボー文化を撮ろうと思ってそこに行ったら、スケーターの姿がたくさん入ってくると思います。わざと引き算しているんですね。

元田：でもそれは正解だと思う。例えばいかにも沖縄らしい写真を見せられて「沖縄なんです」って言われてもね。

滝沢：それと、初めの頃は闇雲にスケーターだけを撮ってたんですけど、いまいちぐっと来なかった。そのうち、スケーターっていう枠があってないようなものなんだなって気が付いた。いろんな人が寄って来るけど、ただ音楽好きだったり、こういうおじさんとか、ジャンルで分けること自体がつまらないことなんだなって。だからスケーターの周辺のものは全部撮るようにしていますね。

元田：応募用紙に書いてあった文章も面白いですよね。世界観があるし、具体的な例え話が出てくるからリアリティがあって。最後に、今回の展示はどういうプランですか？

滝沢：前より広いので、もっと多くして、密集している所とちゃんと並んでいるところとか、いろいろランダムに貼ろうかなと。

元田：バランス感覚があるから出来そうですね。

滝沢：何回通っても見過ごしちゃうのが何枚かあるくらいのほうが面白いのかなって、そういう部分も作りたいと思っているんです。

２００５年５月２５日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）